

「戦国の近江」地域の魅力発信事業

近江戦国探訪ガイドブック 1

# 足利将軍と近江



平成 29 年（2017 年）10 月 9 日

滋賀県教育委員会

## 「戦国の近江」地域の魅力発信事業 連続講座「近江の城郭～足利将軍と近江」のご案内

応仁元年（1467年）に始まる応仁・文明の乱は、約11年間にわたり、全国を戦乱の渦に巻き込みました。その結果、室町幕府の権威は衰退し、各地に実力で領国支配を成し遂げる戦国大名が台頭します。戦国時代の幕開けです。

しかし、近江では強力な権力を持った戦国大名は誕生せず、鎌倉時代から近江守護であった六角氏の支配が織田信長の上洛まで続きます。しかし、その支配のあり方は、応仁の乱につづく将軍の近江動座や伊庭の乱を経て大きく変化を遂げていきます。戦国大名の誕生とは違った形の戦国時代が、近江では展開することになるのです。

一方で、室町幕府の権威が衰退した結果、畿内での政争に敗れた足利将軍が京都を離れ、有力守護の領国に在国する事態が頻発します。近江へも守護六角氏の支援を求めて12代将軍義晴や13代将軍義輝がやってきており、将軍に関わる城館跡が残されています。このように、足利将軍と深いかかわりを持つところが、近江の戦国時代の特徴の一つとなっています。

そこで、足利将軍ゆかりの戦国遺跡をテーマに連続講座を行います。例年通り、講座と現地探訪をセットで行い、「戦国近江の魅力」を広く県内外に発信します。

### 1. 日程・テーマ

- (1) 第1回「岩神館跡・名勝旧秀隣寺庭園」（滋賀県高島市）  
平成29年11月12日（日）
- (2) 第2回「公方屋敷跡・和田城跡」（滋賀県甲賀市）  
平成29年12月3日（日）
- (3) 第3回「坂本」（滋賀県大津市）  
平成30年1月21日（日）
- (4) 第4回「鉤陣所跡」（滋賀県栗東市）  
平成30年2月12日（月・祝）
- (5) 第5回「足利将軍と近江」
  - ①現地探訪「観音寺城跡・景清道」（滋賀県近江八幡市・東近江市）  
日時：平成30年3月10日（土）
  - ②シンポジウム「足利将軍と近江」  
日時：平成30年3月11日（日）  
会場：コラボしが21 大会議室（滋賀県大津市）

2. 各回ごとに参加者募集 事前申込制・先着順

3. 各回の詳細および参加者募集開始は、開催日の約1ヶ月前に滋賀県ホームページ等で公開

4. 問合せ等は滋賀県教育委員会事務局文化財保護課（城郭調査事務所）まで

## 足利将軍と近江

応仁元年（1467）からはじまる応仁・文明の乱は、将軍の後継者争いに端を発し、有力守護の家督争いとも絡み合いながら日本全国を巻き込んだ内乱となります。世に言う戦国時代の幕開けです。将軍の権威は失墜し、中央政権としての室町幕府は弱体化します。かわって地方の守護や有力武将が幕府の支配から自立し、政治権力としての独立性を高めていきます。

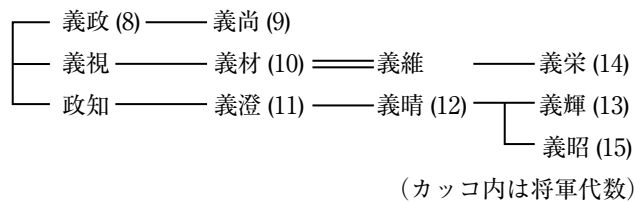
このようにして台頭したのが戦国大名です。甲斐の武田氏、越後の上杉氏、相模の北条氏、駿河の今川氏、安芸の毛利氏など、その出自は守護や守護代、国人など様々ですが、彼らは領国内の領主たちを自己の権力のもとに家臣団として編成し、最高権力者として領国統治を展開しました。一般に戦国時代としてイメージされるのはこのような、室町幕府の衰退と戦国大名の台頭といった様相ではないでしょうか。

しかし、畿内近国では強大な力を持った戦国大名は登場しません。畿内においては、応仁・文明の乱につづく明応2年（1493）の細川政元のクーデター（明応の政変）によって細川氏が政権を握ります。しかしその細川氏も政元以降、後継をめぐる争いの中、二派に分裂します。以後、この両細川家の対立を軸として畿内の戦国史は展開することになります。室町将軍はそうした中、この両派に名分としてかつがれることになり、やはり二派に分裂します。やがて、細川家中の三好氏や松永氏が台頭し、主家細川氏の分裂と絡み合いながら、永禄11年（1568）織田信長の入京を迎えることとなります。

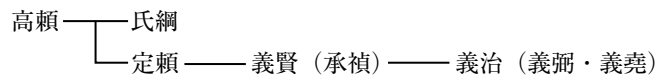
近江の戦国時代は、こうした畿内の戦国史と深く関わりながら展開します。近江の中世は佐々木六角氏が守護として信長の上洛まで支配を続けますが、その間、京都での政争に敗れ、京都を逐われた将軍がしばしば近江に滞在しています。戦国時代、京都を逐われた将軍は有力大名を頼りに京都復帰を果たしていますが、佐々木六角氏もまた、将軍を支える力を持った有力大名として認識されていたのです。

将軍の近江滞在は、第11代将軍足利義澄が水茎岡山城（近江八幡市）に滞在したのをはじめとして、第12代将軍足利義晴が朽木（高島市）・坂本（大津市）・桑実寺（近江八幡市）に、第13代将軍足利義輝が朽木（高島市）・坂本（大津市）に滞在します。将軍を受け入れた佐々木六角氏は、これまで戦国期の領主権力として低く評価されてきましたが、将軍を支える有力大名としてその実力を評価されるとともに、幕府の政争にも関わるなど、戦国期の畿内政治において重要な役割を果たしていたことがあらためて注目されています。

### 【戦国期足利将軍家略系図】



### 【戦国期佐々木六角氏略系図】



## 朽木谷

滋賀県最西端に位置し、安曇川の上・中流域にあたる朽木は、古くから、若狭国小浜と京を短絡する道、俗にいう鯖街道（さばかいどう）が縦断し、街道筋として栄えました。

また、「朽木の杣（そま）」と呼ばれ、京への木材の供給地でした。

鎌倉時代、源平合戦での戦功により佐々木定綱は近江守護となります。その子信綱は、近江を4つに分割し息子達に与えます。朽木庄がある高島は次男の高信が治めることになり高島氏を名乗ります。高信以後は高島氏の息子や一族が分家となり宗家高島氏とあわせて高島七頭（たかしまななかしら）が高島を治めていきます。朽木は、高信の次男頼綱が治め、頼綱の三男・義綱が朽木庄を領して朽木氏を称し高島七頭の一員となっていきます。

朽木氏は、室町時代に足利將軍家に仕え、朽木材秀・植綱・晴綱・藤綱・輝孝が將軍（足利義材（義植）・義晴・義藤（義輝））から偏諱を受けています。特に朽木植綱は、永正初年（16世紀初め頃）には幕府奉公衆に、第12代將軍義晴の時代（天文初期～中期、1530年代～1540年代）には、將軍の側近集団であった内談衆に、第13代將軍義輝の代には將軍の御供衆に任命され、足利義晴・義輝父子が朽木谷へ逃亡した際の朽木氏当主でした。第15代將軍足利義昭の時当主であった朽木元綱は、朝倉義景を攻めた織田信長が、浅井長政の裏切りにより急遽退却を余儀なくされた時、信長の撤退を助けました。また、天下分け目の関ヶ原の戦いにおいては当初西軍についていましたが東軍に内通し、そのため江戸幕府成立後も大名として存続を許されました。元綱の死後、領地はその3子（宣綱が6470石・友綱が3010石・朽木植綱の3010石）に分割され、嫡流の長男・宣綱は交代寄合の旗本となりました。

## 朽木陣屋跡

江戸時代、朽木を支配した旗本朽木氏の陣屋は、それまでであった朽木城を拡張して築かれたと言われています。南辺310m、北辺200m、東辺115m、西辺125mの台形をしており、周囲を堀と土塁で囲まれていました。現在は、井戸跡だけが残っています。



朽木陣屋跡

## 朽木市場

朽木陣屋にともなう城下町的な町場で、宿場町ではありません。市場内は身分によって住み分けられ、北端の下市は農民、中央の本町は商工業者、陣屋と本町の間は殿町は家臣達の屋敷がありました。



朽木市場の町並み

## 指月谷上柏の興聖寺跡

嘉禎3年(1237)近江守護佐々木信綱は京都で宋から帰洛した曹洞宗開祖道元禪師に謁し、承久の乱で戦死した一族の供養を依頼し、朽木の里に招きます。このとき禪師は上柏(かみかし)の指月谷付近の様子が宇治の興聖寺に酷似していると感激し、一寺の創建を奨め、山号を高巖山興聖寺とするよう勧奨しました。仁治元年(1240)、七堂伽藍が完成し、寛元元年(1243)道元禪師が再び当山に寄って御教化して以来、永平寺の直末とし慶長3年まで格別兼務地として続くとともに朽木氏の菩提寺となってきました。



興聖寺跡の朽木家墓所

## 岩神の秀隣寺・興聖寺

秀隣寺は、慶長11年(1606)、朽木宣綱が妻である京極マグダレナの菩提を弔うために岩神館跡に建てた寺です。墓地には「秀隣院」と彫られた五輪塔があり、マグダレナの墓と伝わっています。享保14年(1729)に指月谷興聖寺と秀隣寺が入れ替わり、現在は興聖寺が建っています。今の本堂は文化11年(1814)に焼失したものを安政4年(1857)に再建したものです。関西花の寺「第14番」老椿の寺として有名です。一方、上柏に移った秀隣寺は文化10年(1813)頃無住になり、その後野尻に移転し現在に至っています。



京極マグダレナの墓

## 国指定名勝旧秀隣寺庭園・岩神館跡

享禄元年(1528)室町幕府の第12代将軍足利義晴が、京都を追われ朽木種綱を頼り、岩神館に滞在した時、管領細川高国が将軍を慰めるために造った庭とされ、現在の興聖寺境内にあります。安曇川の清流と対岸の指月谷や蛇谷ヶ峰を借景として、西側の築山に石を利用した滝をしつらえ、屈曲した汀線を持った池に仕上げられています。池には、2つの鶴亀島を置き、楠の化石の石橋が対岸の出島に架けられています。築庭当時の藪椿がある池泉観賞式庭園で昭和10年に国の名勝に指定されました。また、境内背面には土塁と空堀がL字状に残っており、岩神館跡の遺構と言われています。



国指定名勝旧秀隣寺庭園



朽木探訪図

## ■ 甲賀・和田氏の城と公方屋敷

「流浪の将軍」とも呼ばれる室町幕府最後の将軍 足利義昭。その第一歩は、甲賀・和田から始まったといっても過言ではありません。兄である将軍足利義輝が三好三人衆によって暗殺され、興福寺に幽閉されていた一乗院覚慶、後の第15代将軍足利義昭は、細川藤孝・和田惟政らの手引きにより、多羅尾・伊賀を経由して惟政の本拠地である甲賀・和田に逃れます。滞在した約4ヶ月の間には、上杉輝虎（謙信）宛に室町幕府再興を表明する書状を送るなど、この地で上洛への強い意志を固めたようです。

惟政の本拠地である和田谷は、和田川が流れる奥行き約1km・幅100m程度の狭い谷です。和田川は水量も少なく、水田には不向きな土地だったようですが、杣川沿いには伊賀道が通り、和田川沿いに道を遡っても伊賀に抜けることができるという地の利があります。和田川を挟んで東側の丘陵地に殿山城跡・後に将軍＝公方となる覚慶のための館と伝えられる公方屋敷跡・和田城跡、西側の丘陵地先端に公方屋敷支城跡・和田支城跡Ⅲ・和田支城跡Ⅱ・和田支城跡Ⅰの7つの城跡があり、「和田城館群」と総称されています。各城跡は、土塁で囲まれた30～50m（半町）四方程度の単郭方形を基本としていますが、それぞれが単独の城館としてではなく、その配置や構造から異なる役割を持ち、全体として一つの城として機能していたと考えられます。

## ■ 杣川・伊賀道

北東に開く和田谷の前面には、杣川が流れています。谷への入り口をふさぐ天然の堀だと考えると、これも和田城館群を構成する重要な要素になります。杣川沿いを通る県道4号やJR草津線は、東海道を経由して伊勢・伊賀と京を結ぶ伊賀道にあたります。一乗院覚慶は、上洛・幕府再興の日も近いと信じて、この伊賀道を通り野洲郡矢島（滋賀県守山市）に移ったのです。



和田谷の入り口をふさぐ杣川

## ■ 公方屋敷支城跡・殿山城跡

和田谷の入口に配置されているのが、和田川を挟んで東側丘陵の最先端に位置する殿山城跡、西側丘陵の最先端に位置する公方屋敷支城跡です。公方屋敷支城跡は、丘陵上にある30m×50m程度の郭には櫓台と考えられる高まりがあります。この櫓台の西側には、西側に延びる尾根を切断する堀切があります。尾根道で公方屋敷跡と繋がる殿山城跡は、ハの字状の土塁を持つ30m×30m程度の小さな城です。いずれも、和田城館群中でも伊賀道等を監視する見張り台的な機能が高い城跡です。



公方屋敷支城跡遠景

## 公方屋敷跡（甲賀市指定史跡）

公方屋敷跡は、和田城館群の中で唯一山麓谷部の平場にあります。背面は丘陵尾根、土塁状に成形した小丘陵で囲まれた台形状の平場は、約5,000㎡の広さがあり、和田城館群最大の郭です。覚慶を庇護するために新しく作ったのではなく、もともと和田氏の「屋形」（居館）であったと考えられます。南側の丘陵上には、土塁囲いの郭を含む2つの郭があり、屋敷の守りを固めています。



公方屋敷跡

## 和田城跡

和田谷の狭隘部に面した東側丘陵上、つまり和田城館群の中で最も奥に位置しています。丘陵頂部の土塁に囲まれた約50m×50m四方（半町四方）の主郭を中心し、小規模な郭が周囲に配置されています。見どころである主郭を取り囲む土塁の内、南側の土塁は幅約20m・高さ約7mを測り、伊賀方面への櫓台的な機能を持っていた可能性があります。規模は、対岸の和田支城跡Ⅰが大きいです。中心的存在であったと考えられます。



和田城跡の土塁と郭

## 和田支城跡Ⅰ

和田城跡の対岸にあるのが、和田支城跡Ⅰです。丘陵頂部から先端にかけて3つの郭が階段状に並んでいます。頂部郭は土塁だけでなく、防御性を高めるための急傾斜の切岸が見どころの一つです。2段面の郭は、約50m四方（半町四方）の広さがあり、南西隅には櫓台的な方形の高まりがあります。和田城跡と共に、中心的な施設です。



和田支城跡Ⅰ（遠景）

## 和田支城跡Ⅱ・和田支城跡Ⅲ

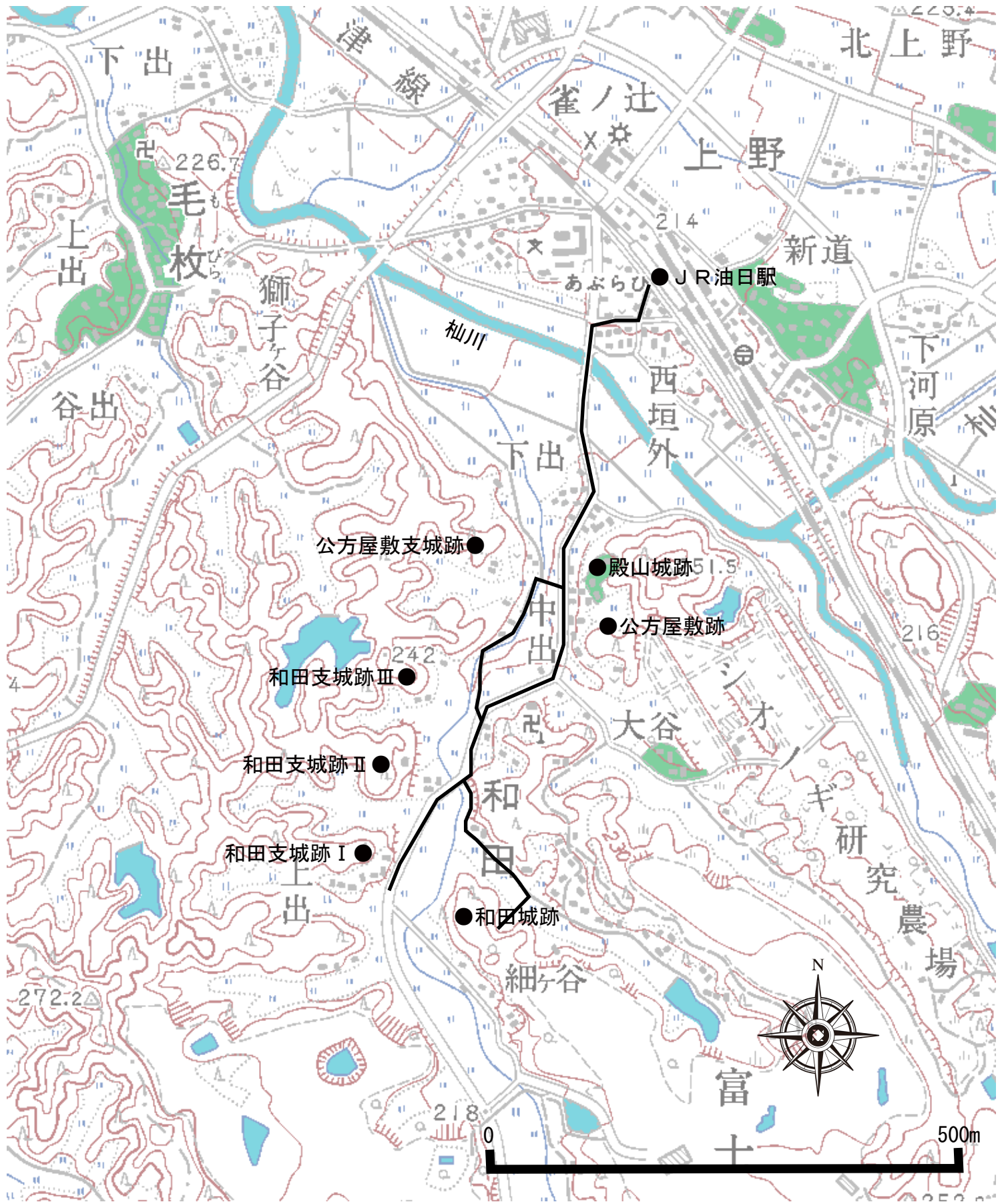
和田川西側丘陵上に位置する2つの城跡は、いずれも土塁囲いの単郭構造です。和田支城跡Ⅱでは約30m四方の郭の北側と西側には土塁が良く残り、その外側には空堀が巡っています。特に、南西側には堀外側の土塁も残っています。

和田支城跡Ⅲの郭はやや不整形ですが、45m×50m程度の広さがあります。周囲には高さ5m程度の土塁が巡り、土塁の切れ間が入り口（虎口）になります。



和田支城跡Ⅱ遠景（上）・和田支城跡Ⅲ遠景（下）





和田探訪図

## 坂本

坂本は世界遺産に認定された比叡山延暦寺の琵琶湖側に広がる町です。平安時代より、山側の上坂本が門前町、湖畔の下坂本が荷揚げ港として発展し、延暦寺へ納める物資が集積し、現在の運送業や倉庫業にあたる馬借や車借、土倉や問丸がひしめく商業都市でした。また、比叡山の隠居した僧侶が住む里坊が並び、戦国時代には三好長慶に敗れた室町幕府第12代将軍足利義晴・第13代将軍足利義輝と細川晴元らが都落ちして逃れてきたり、織田信長の焼き討ち、明智光秀による坂本城築城、豊臣秀吉による日吉大社の復興といった歴史でも有名な場所でもあります。

## 坂本門前

坂本の中心に位置するのが日吉馬場にある中ノ鳥居（中神門）です。この鳥居より西側に里坊や日吉社にかかわる社司や宮仕といった宗教者が主に住まう空間が、東側に山門公人をはじめ一般の人々といった在地人の住まう空間が広がっています。この両者が一体となって延暦寺や日吉社を支えてきました。

ところで、延暦寺は、三塔十六谷と呼ばれ、東塔・西塔・横川の三塔とその中に谷と呼ばれる16のエリアが存在します。山上には「山坊」と呼ばれる僧侶たちが仏道修行する場があり、

これに対して山麓において老僧や病弱の僧徒が隠居保養するため天台座主から賜った僧坊が、「里坊」の始まりだと言われています。現在見られる里坊は元亀2年（1571）の織田信長の焼き討ち以降に復興したもので、支院（求法寺、生源寺、弘法寺、慈眼堂、滋賀院門跡など）を含めて54ヶ寺あり、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、名勝としても延暦寺里坊庭園10ヶ所が国の指定となっています。



日吉大社中ノ鳥居

## 日吉大社

全国にある日吉・日枝・山王神社の総本社で、通称「山王権現」とも呼ばれています。『古事記』に「大山咋神、亦の名を山末之大主神。此の神は近淡海国の日枝の山に坐し」とあり、崇神天皇7年（紀元前91）に日枝の山頂から現在の地に移されたと言われています。東本宮と西本宮があり、このうち東本宮は、本来、牛尾山（八王子山）山頂の磐座を挟んだ2社（牛尾神社・三宮神社）のうち、牛尾神社の里宮として、崇神天皇7年に創祀されたものとも伝えられています。東本宮の祭神・大山咋神



国宝日吉大社東本宮本殿

で、西本宮の祭神・大己貴神については、近江京遷都の翌年である天智天皇7年（668）、大津京鎮護のため大神神社の神が勧請されたと言われています。平安時代には都の表鬼門に当たることから都の魔除けの神社として親しまれてきました。また魔除けの象徴として「神猿（まさる）」と呼ばれる猿が祀られ、「魔

が去る」「何よりも勝る」と言われ大切にされてきました。特に秀吉は幼名を「日吉丸」といい、あだ名が「猿」であったことから、当社を特別な神社と考え元亀2年の焼き討ちで灰燼と帰した社の復興に尽力してきました。境内を流れる大宮川にかかる大宮橋・走井橋・二宮橋と呼ばれる花崗（かこう）岩でできた日吉三橋のうち二宮橋は豊臣秀吉が寄進したと伝えられる日本最古の石橋だと言われています。

## ■ 坂本城跡

元亀2年（1571）9月、比叡山の焼き討ちを行った後、織田信長は比叡山延暦寺の監視と琵琶湖の制海権獲得のため、明智光秀に命じて交通の要所である坂本の地に坂本城を築かせました。天守をもつ豪壮絢爛な水城の姿は宣教師フロイスが安土城に次ぐ城であったと『日本史』に記しています。

光秀は天正10年（1582年）の本能寺の変で信長を討ちましたが、直後の山崎の戦いにおいて羽柴秀吉に敗れ、それを知った重臣の明智秀満が光秀の一族と共に城に火を放ち自害し、坂本城は焼失しました。その後、丹羽長秀によって坂本城は再建されましたが、秀吉が浅野長政に命じて大津城を築城した天正14年（1586年）頃に廃城となりました。

城跡は琵琶湖岸に石垣の一部を残す以外、地表面にまったく痕跡を残していませんでしたが、1979年（昭和54年）に大津市が行った発掘調査で、明智秀満が天守に火を放ち落城焼失した時のものと考えられる10cm～30cmの焼土層が発見されました。焼土層の下からは光秀時代の礎石建物・石組み井戸等や焼けた瓦・土器が、その焼土層の上にある整地した層からは丹羽長秀時代の礎石建物や石組み溝等が発見され、城の本丸にあたる所ではないかとされています。

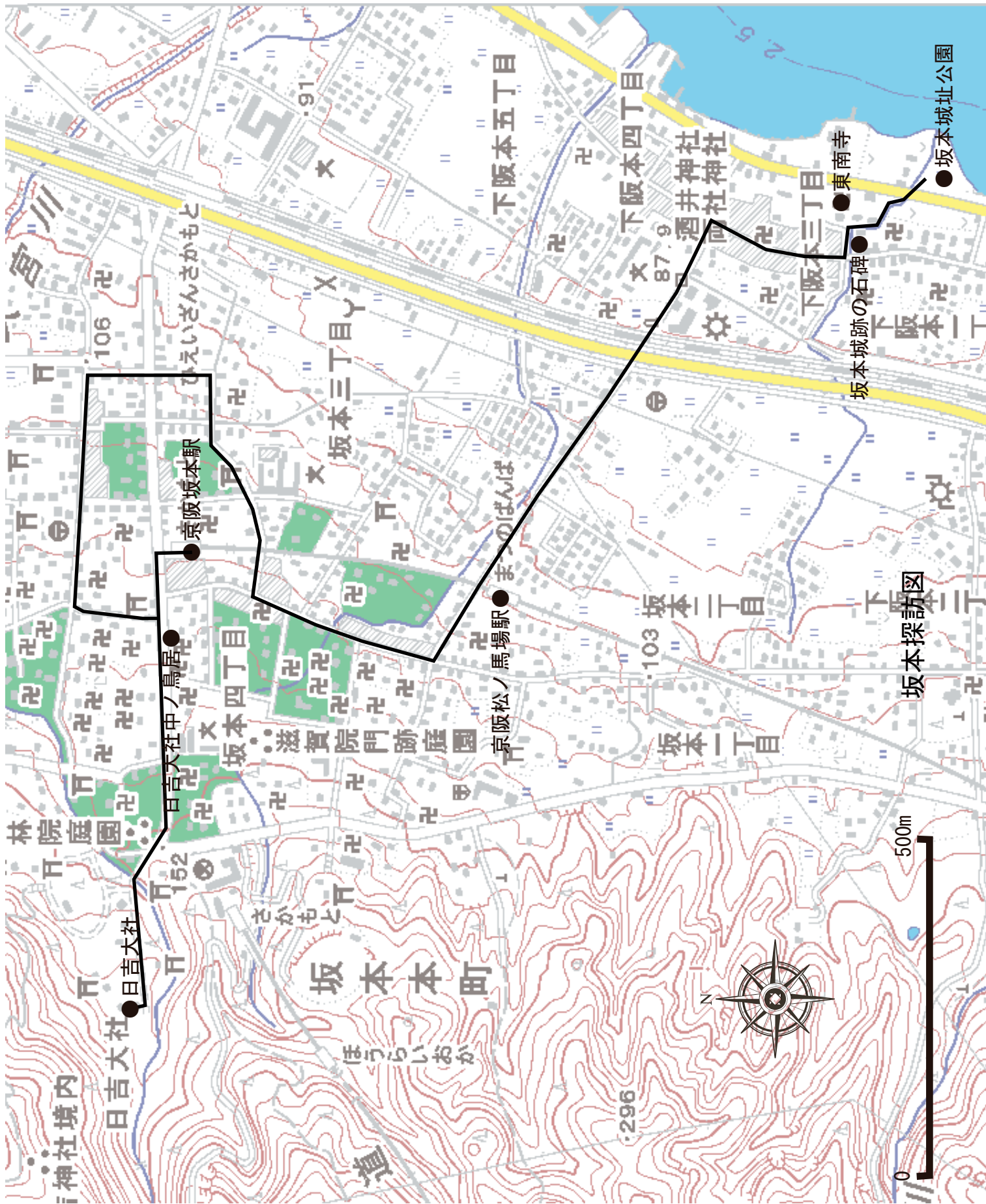
また、平成21年から24年にかけて坂本城の移築された城門と伝わる聖衆来迎寺の表門が解体修理された際、部材の一部に15世紀中頃から17世紀前期にかけてみられる大工道具の鉋の刃の痕跡等が見つかり、坂本城の城門である櫓門の部材が転用された可能性が高いことがあらためて確認されました。後に築かれた大津城、膳所城も琵琶湖に面して本丸がその先端部に位置していること等、類似点が多い縄張りとなっており、坂本城が先行した城ではないかと考えられています。



西近江路沿いに建つ坂本城跡の石碑



聖衆来迎寺表門



## ■ 鉤の陣

長享元年（1487）9月12日、室町幕府第9代将軍足利義尚は、自ら軍勢を率いて近江に出陣しました。赤地錦の直垂に具足を身に着けたその姿は颯爽として派手やかで、大いに見送る人々の目を引き付けたようです。

近江にはいった義尚は、坂本に着陣し、そこから陣を鉤安養寺（栗東市安養寺）に移し、さらに下鉤真宝館（栗東市上鉤）へと移動させました。その後、長享3年（1489）3月に陣所で没するまで、およそ2年半を鉤の陣所で過ごすことになります。義尚の近江出陣が鉤の陣と呼ばれる所以です。

足利義尚は、室町幕府第8代将軍足利義政の嫡男として生まれました。自身の誕生が、応仁の乱の引き金となったように、生まれながらに将軍権力の衰退と復活を宿命として背負った人物です。この近江出陣も、そうした将軍権力の復活を目指しての行動でした。

応仁の乱以後、将軍権力は衰退し、かわって諸国の守護や守護代、有力国人などの地方権力が台頭し、幕府から自立していきます。近江においては、守護六角高頼が自身の権力強化を図るなか、延暦寺などの権門寺社の荘園を押領し、また家中の国人たちの押領を容認することで権力の集中をはかっていた。対して権門寺社は押領された荘園の回復を幕府に訴えます。義尚の出陣はその押領を止めさせるためのものですが、その先には守護が将軍に従うという、室町幕府のあるべき秩序の回復を目指していました。

またこの出陣は、義尚自身が将軍として自立するためのものでもありました。将軍就任後も父義政の強い影響力のもとにあった義尚にとって、将軍としての実権を確立するために、評定衆や奉行衆などの幕府の実務担当者を率いて出陣し、幕府そのものを近江に移動させたのです。また鉤の陣所においては、犬追物や的初、松拍子といった技芸や諸行事が行われるなど、単なる軍事基地ではなかったことがうかがえます。

義尚が陣没したことによって、幕府の秩序を回復するという目的は達成されませんでした。以後の近江では、戦国期の守護として権力を確立した六角氏が、幕府との間にあらたな関係を築き、室町将軍を支える有力守護となっていくのです。

## ■ 鉤陣所跡

史料によれば、義尚が在陣した場所は「下鉤真宝館」と記されています。現在、この場所については、栗東市上鉤の永正寺付近が比定されています。永正寺周辺は、近世には寺内村に含まれますが、寺内の地名は「陣内」が転訛したものと伝えられます。その一方で、上鉤寺内という地名が天正期の史料に現れ、現地に残る遺構からも真宗寺院永正寺を中心とする寺内町であったことがうかがえます。

江戸時代に描かれた「鉤里陣図」には、土塁と堀に囲われた「本丸」「二之丸」「三之丸」といった表記があり、「城主足利尊氏ヨリ九代目 征夷大将軍源義尚公延徳元年三月廿六日御他界」と記されています。現在は、この絵図をもとに鉤陣所跡が復元されていますが、今も永正寺の周囲には土塁が残り、周辺の集落内には堀の痕跡と思われる水路が走っています。



鉤陣所跡遠景

しかし一方で、永正寺が建っているのはあくまで上鉤であり、史料に「下鉤」とあることからここは別の場所を陣所跡とする説もあります。



永正寺と土塁

## 東海道

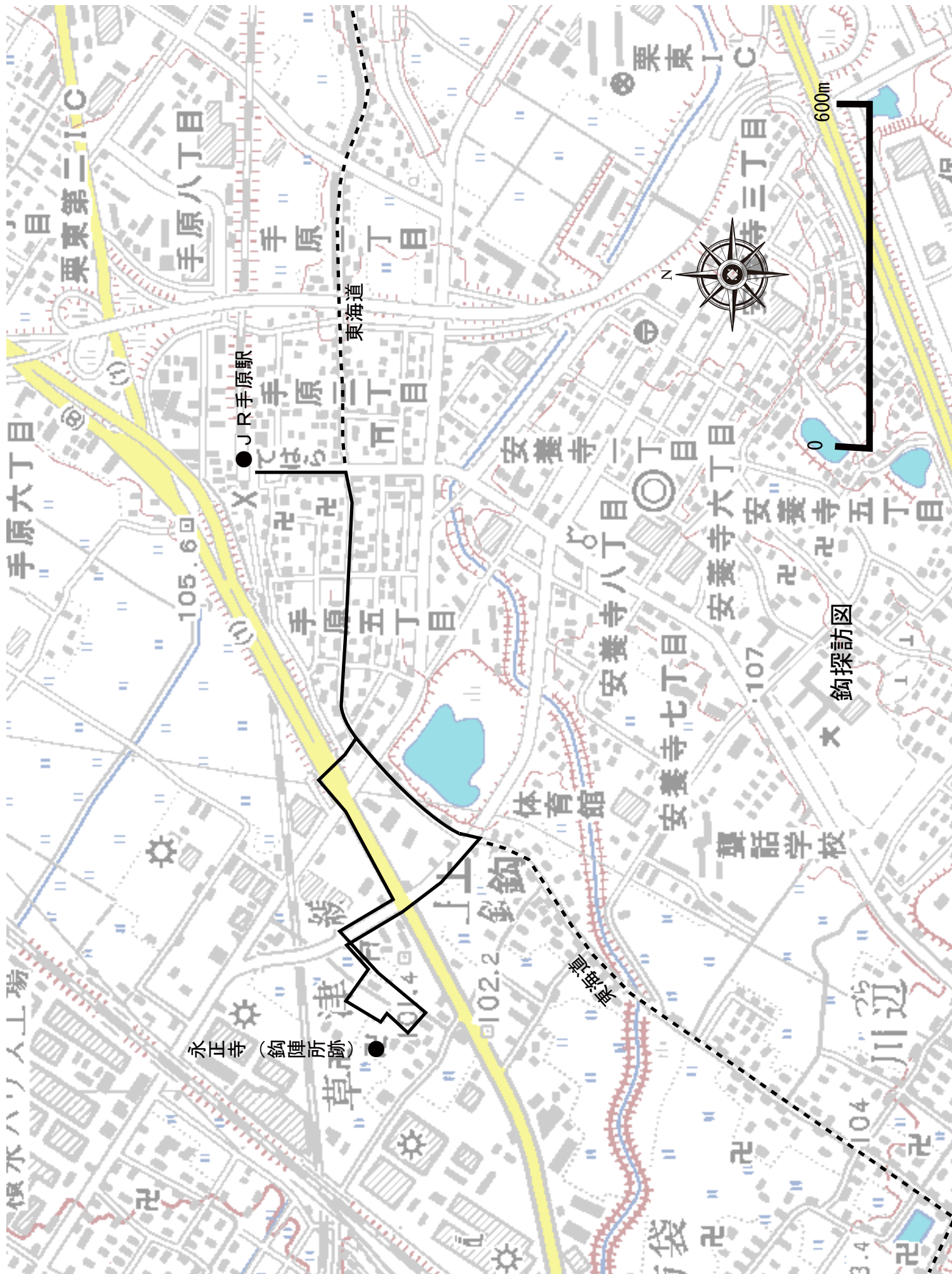
江戸時代、五街道のひとつとして知られる東海道は、江戸と京都を結ぶ東西交通の幹線でした。しかし中世には東西交通の主要幹線としては、東山道が利用され、東海道は伊勢との連絡路としての意味合いが強かったようです。

永正寺付近の東海道は、JR 草津線の南側を線路に平行するようになっています。西は上鉤付近で南西方向に進路を変え、草津宿へと向かいます。一方東は、JR 手原駅の南からさらに東に進み、野洲川へと向かいます。



永正寺付近の東海道

永正寺のある寺内村は、東海道の約 300m 北に位置します。寺内町は一般的に街道付近に築かれることが多いのですが、ここは街道からは少し離れています。ただ、南に位置する上鉤村と寺内村は本村・枝村の関係にあり、上鉤村が街道沿いに位置することから、商業機能を上鉤村が、宗教機能を寺内村が担ったとする考えもあります。



## ■ 観音寺城と佐々木六角氏

近江守護佐々木六角氏が戦国時代に居城としたのが観音寺城です。標高 432m の叡山の山頂から南山麓にかけて郭が広がる大城郭で、中世五大山城の一つに数えられます。

観音寺城が登場するのは南北朝時代。佐々木氏頼が観音寺に布陣したことが『太平記』に記されていますが、この時は単なる砦のようなものだったと思われます。それ以後もしばしば陣所とされているようですが、佐々木六角氏の居住する城として整備されたのは、16 世紀前半のことと考えられます。

観音寺城の特徴は石垣を多用している点にあります。石垣の本格的な導入は安土城以後のことであり、それより古い観音寺城に石垣が多用されているのは例外的なことで、戦国時代としてはほとんど唯一の城になります。

観音寺城の中核部分は、本谷を挟んで観音正寺境内の向かい側にある、伝本丸、伝平井丸、伝池田丸のあたりと考えられます。これらの郭は、城内でも特に面積が大きく、方形志向の平面形を呈し、大石を使った壮大な石塁が郭を囲んでいます。天文 13 年（1544）に城を訪れた連歌師谷宗牧は、山上の城の「御二階」の座敷に案内され、そこには「数寄」の茶室に茶器の名品が用意されていて、城の退出にあたっては秘蔵の古筆を送られたと書いています。観音寺城が要塞であるとともに、六角氏の風雅な生活の場所であったことがうかがえます。

永禄 11 年（1568）に織田信長が観音寺城に攻め寄せると、六角承禎・義治親子は正面から戦うことなく逃亡し、あっけなく開城しました。その後、天正 7 年（1579）に安土城が完成したことで、観音寺城は歴史的役割を終えたようです。

## ■ 史跡観音寺城跡 伝本丸・伝平井丸・伝池田丸

山頂から南西に延びる尾根筋上の郭です。尾根の先端から北に向かって伝池田丸・伝平井丸・伝本丸と大きな郭が並びます。伝本丸は江戸時代の古絵図に「本城」と記されていることから、城の中核部分とされていますが、ここよりも高い地点にも郭が存在すること、この場所が郭の分布する範囲の西端に位置することなどから、城の中核部分として理解してよいかは疑問が持たれています。伝平井丸・伝池田丸は六角氏の被官であった平井氏・池田氏の屋敷跡とされている郭で、これも古絵図の記述が根拠となっています。

いずれの郭も周囲を石塁で囲われ、虎口を伴っています。虎口は簡易な平虎口が基本ですが、伝本丸の北から桑実寺に向かう場所に位置する裏虎口は、石塁をズラして配置する食い違い虎口となっています。ただし、周囲の状況からみて後から改修されたものである可能性があります。また伝平井丸の虎口は、城内でも最も巨大な石を用いた立派な平虎口です。



上から伝本丸裏虎口・伝平井丸虎口・伝池田丸



## 伝御屋形跡

織山の南麓、石寺集落のもっとも高所に位置する場所が伝御屋形跡です。ここには現在天満宮が建っていますが、「上御用屋敷」という地名があることから、六角氏当主の居館跡に比定されています。発掘調査が行われていないため、遺構の状況などは分かりませんが、おそらく、六角氏が観音寺城を居城とした当初は、山麓の居館を平時の住まいとしていたと考えられます。郭の土台を形成する高石垣は、城内でももっとも高いもので約6mになります。隅の積み方は整然とした算木ではなく、稚拙な印象を与えることから、比較的古い時代に積まれたものと考えられますが、伝平井丸の石垣とも積み方が似ており、単純に山上の郭群に先行して整備されたとはいえないようです。



伝御屋形跡の高石垣

## 桑実寺

白鳳6年(678)に天智天皇の勅願で創建されたと伝えられる桑実寺は、薬師如来を本尊とする寺です。藤原鎌足の長男定恵が寺を開基したと伝えられています。室町時代前期に建造された本堂は国の重要文化財に指定され、昭和57年から60年にかけて修復工事が行われました。

戦国時代、京都を追われた将軍足利義晴は、六角定頼を頼って近江の各地に寄寓しました。その義晴が天文元年(1532)前後の数年間を過ごしたのが桑実寺です。義晴が滞在したのは子院の正覚院であったと考えられます。義晴はここで婚儀を行うなどしたので、この地には都の要人が頻繁に訪れ、さながら仮幕府のようであったといわれています。正覚院滞在中の義晴は、土佐光茂に「桑実寺縁起絵巻」を描かせて桑実寺に奉納しました。

信長が観音寺城を攻撃して六角氏を放逐すると、信長は桑実寺に足利義昭を迎え入れて、自身の上洛にそなえました。義昭が着陣した正覚院は、桑実寺参道の山門を入ってすぐの右手がその跡地とされています。現在は竹林が茂っていて立ち入ることはできませんが、敷地にある巨石は正覚院の庭石であったともいわれています。



重要文化財桑実寺本堂



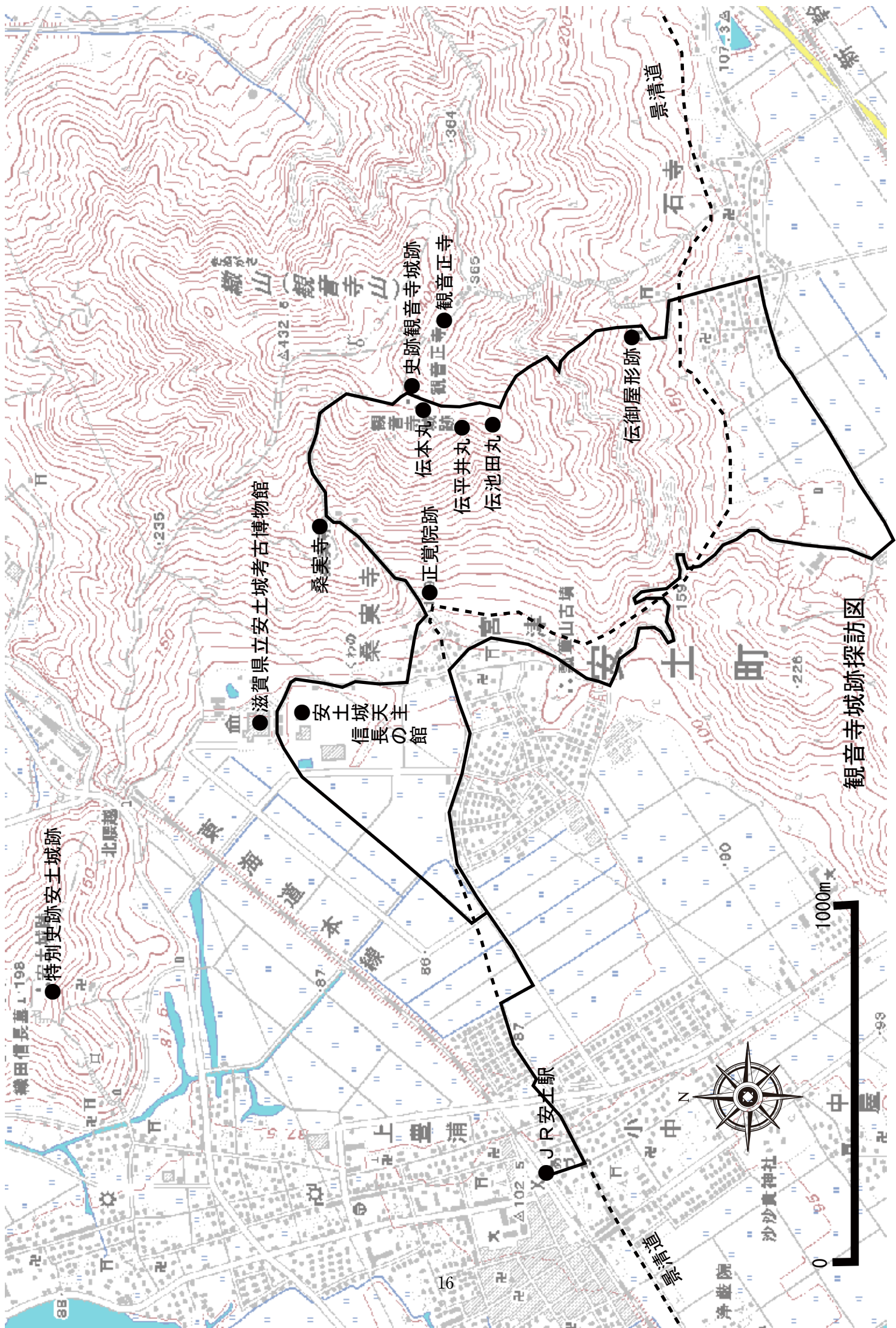
正覚院跡

## 景清道

東山道から織山の南麓、石寺を通り、織山中の鳥打峠を越え、桑実寺から小中の集落を経て浄厳院の門前を通る道です。平安末期の武将平景清が尾張より京都へ行く際に通ったことに由来するといわれています。あるいは主要道をさけて通る「かげのみち」からきているとする説もあります。

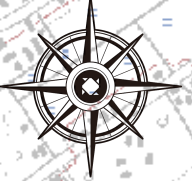


景清道

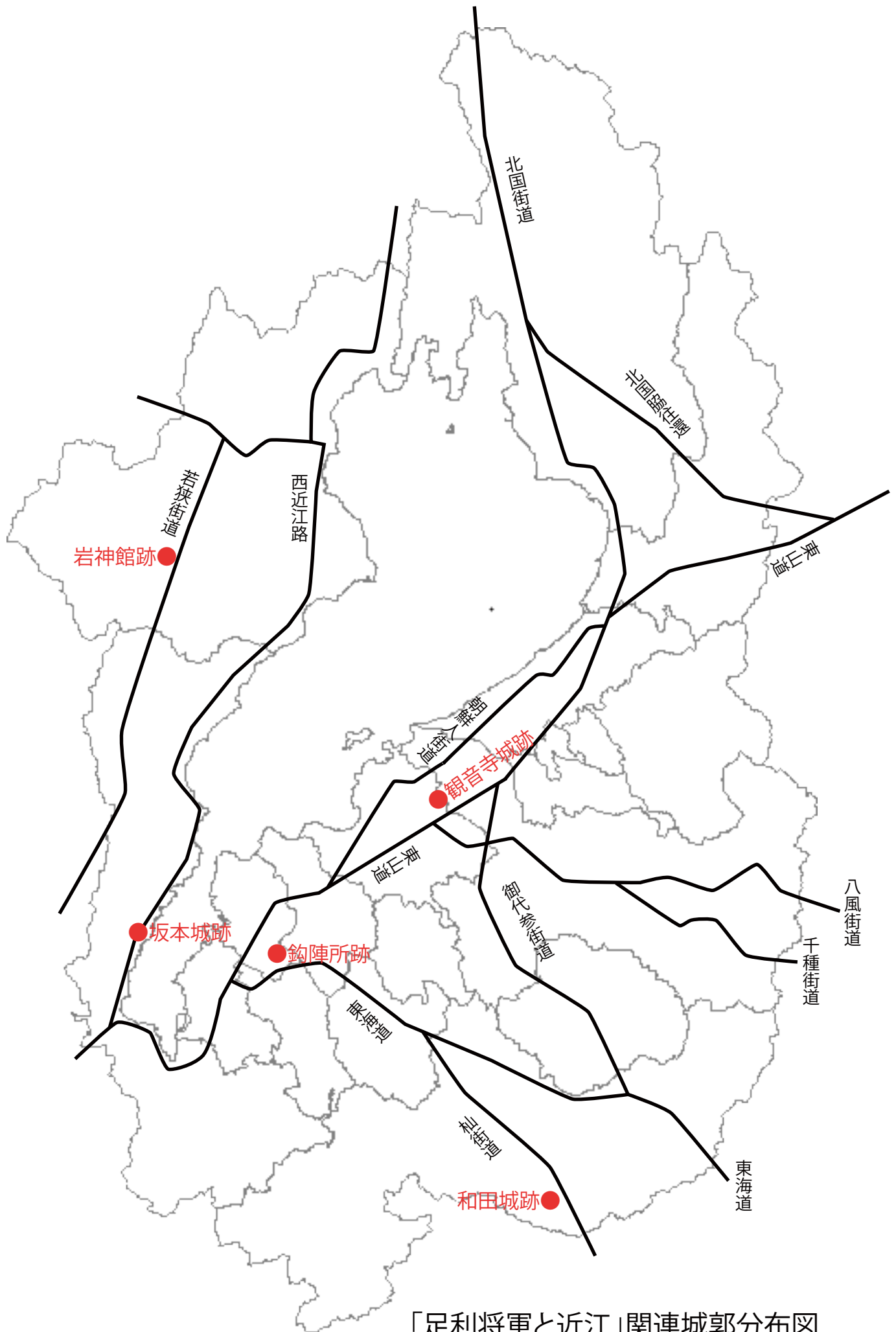


観音寺城跡探訪図

1000m



0



「足利将軍と近江」関連城郭分布図

目 次

足利将軍と近江	1
朽木谷	2
甲賀・和田氏の城と公方屋敷	5
坂本	8
鈎の陣	11
観音寺城と佐々木六角氏	14



発行 平成 29 年（2017 年）10 月 9 日

編集 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課

〒521-1311

滋賀県近江八幡市安土町下豊浦 6678

城郭調査事務所

TEL0748-46-6144 FAX0748-46-6145

Mail ma16@pref.shiga.lg.jp